

## 小・中学生の親子関係、親からの期待、子どもの目標の関係<sup>1)</sup>

— 親子関係がよいと子どもは親の期待に応えようとするのか —

遠山 孝司<sup>2)</sup>

### 問題と目的

親は子どもに対して「このような人間に育てたい」、「このような人間に育てたい」といった期待や教育目標を持つ。そして、これらの期待や教育目標は子どもに影響を与えると考えられている。柏木(1990)は、親の期待や願いが子どもを取り巻く環境を作り、その環境が子どもの発達に影響を与えているとしている。また宮島(1994)も、子どもは親の行為を模倣するだけでなく親と異なることをするが、この変換にしても自由意志的・偶然的なものではなく、家庭やその他の環境に媒介された再生産の行為と見ることができるとし、子どもが進路選択等に関して親からおおいに影響を受けると述べている。そして実証的な研究においても親が子どもに対して持つ期待や教育目標は子どもに影響を与えることが示されている。伊藤・秋津(1983)は、周囲からの性別に基づく期待によって獲得された性役割ステレオタイプが中学生、高校生、大学生、成人の男女がもつ性役割観に影響することを示している。職業選択に関連して、伊藤(1980)は大学生の娘が将来において希望するキャリアパターンに父親、母親が娘に期待するキャリアパターン、父親、母親の性役割観、娘に対する躰、父母の社会経済的な階層が影響するとしている。Majoribanks(1997)は親の志望や支援が、Patrikakou(1997)は親の期待が、それぞれ青年の教育とキャリアに関する志望に関係していることを示している。また、親の職業を子どもが継承する職業継承という現象の大きな要因として、親の期待があることが示されている(小川・田中, 1979, 1980; 田中・小川, 1981, 1982)。これらは親の期待や教育目標が子どもに影響することを示すものである。

親が子どもに影響を与える期待や教育目標以外の要因として、親子の関係性や親の養育態度を扱った研究が多数みられる。そして、親子関係や親の養育態度は子どもの性格特性や自己評価、自己愛的傾向、自己信頼感、独立意識に関連することが明らかにされている(稲葉・戸田, 1999; 小嶋, 1967; 宮下, 1991; 森下, 1990; 小野寺, 1993; Sears, 1970; 清水, 1999; 徳田, 1987; 山本, 1977)。他にも親子関係や親の養育態度、親の役割行動は子どもの向社会的行動や社会的スキル、自己表現、心理的適応、学校適応感、スクール・モラル、不登校傾向、非行傾向、攻撃行動に影響する(文野・藤田, 2000; 五十嵐・荻原, 2004; 北村・無藤, 2001; 松山, 1979; Miller, Bernzweig, Eisenberg, & Fabes, 1991; 三隅・阿久根, 1971; 小保方・無藤, 2005; 酒井・菅原・眞栄城・菅原・北村, 2002; 谷井, 1996; 谷井・上地, 1994; 戸ヶ崎・坂野, 1997)、親子関係は将来の人間関係や恋愛観に影響する(諸井, 2004; 酒井, 2001)、母親の子どもとのコミュニケーションのスタイルや学習指導態度は子どもの課題成績や将来の知的能力、テスト不安に影響する(三宅・東, 1979; 孫・松原, 1991)、などの知見がこれまで得られている。

このように、これまでの研究において親の期待や教育目標、親子関係や親の養育態度はそれぞれが子どもの目標に影響を与える、ということが示唆されている。しかし、庄司・藤田(2000)は大学生が想起した中学生の頃の親の養育態度と親の期待の関連について、子どもが認知している親の養育態度によって親の期待の認知が異なるとしている。そして、親が子どもに影響を与える過程について、両親の学歴志向が子どもに対する養育態度につながり、それが結果的に大学生のタイプA行動パターンの発達を促進する(大芦・岡崎・山崎, 1996)、親の性格特性と子どもに対する態度との間に関連があり、親の子どもに対する態度と子どもの性格特性に関連がある(小高, 1994)などの影響を受ける過程が示唆されている。これらの知見から、子どもの親の期待の認知と親子関係の認知は関連しており、親の期待の高さが親子関係

1) 本研究は1999年に名古屋大学教育学研究科に提出した修士論文「両親からの期待と子どもの期待に対する反応の関係 —親子関係に着目して—」の一部を再分析し、加筆、修正を加えたものである。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生

の認知に影響を与え、結果として子どもの目標が親子関係と親の期待の両方から影響を受けているようにみえる可能性が考えられる。また、親子関係の認知が親の期待の認知を規定し、親子関係のよさによって親の期待の高さの認知が影響を受け、結果として子どもの目標が親子関係と親の期待の両方から影響を受けているようにみえるという可能性も考えられる。

さらに、親子関係、親の期待、子どもの目標の関連について、親子関係のよさによって子どもが親の期待に応えようとするかどうかが決定的な過程、もしくはそれに類する過程もいくつかの研究で検討されている。森下(1979)は、子どもの価値観や性格の形成について、子どもの親への同一視と親子の類似性に着目し、あたたかく愛情の深い発達の同一視や依存的同一視が親子の類似性を生じさせる、罰や脅威を与える攻撃者としての親への防衛的同一視や、報酬や罰を与える役割取得的な同一視は親子の類似性の原因とはなりにくいとしている。この他に親子の類似性を規定する要因として、親の子どもに対する態度(森下, 1982; 小口, 1991)、親の夫婦関係と家族の機能(菅原・八木下・詫摩・小泉・瀬地山・菅原・北村, 2002)などがとりあげられている。子どもの職業選択希望の形成に親の期待が影響することを示した田中・小川(1981, 1982)は、子どもの親に対する同一視が親の職業期待を自らの職業希望とするかどうかに影響を与えていることを明らかにしている。今井(1986)は、子どもが親のいうことを守ったり、指示に従ったりする際にその理由となる親の特性を「社会的勢力基盤」と呼び、大学生が両親から影響を受ける際の社会的勢力基盤として、「参照-専門勢力」と「魅力勢力」は「賞-罰勢力」よりも強いことを示している。また、Steinberg, Lamborn, Dornbusch, & Darling (1992)は親の態度に威厳がある場合に親の子どもに対する働きかけと子どもの学業コンピテンスの結びつきが強くなることを示している。Mize & Pettit (1997)は、3~6歳児の母親が子どもに対して示す態度、子どもが遭遇する問題場面において与える情報の解釈方法や奨励する方略は、母子関係にあたたかさがあまりみられない場合に子どもの社会的スキルや攻撃性の強い予測因になるが、母子関係があたたかいものであった場合、母親の態度、解釈、方略は子どもの社会的スキルと攻撃性などを強くは予測しないとしている。これらは親への同一視や親子関係によって、親の期待と子どもの目標の関連や親子の類似性が異なる可能性を示唆するものである。

そこで本研究では、親子関係と親の期待、そして子どもの目標を小学生と中学生を対象に調査し、親の期待と親子関係を個別に捉えた際に親の期待、親子関係のそれ

ぞれが子どもにどのような影響を与えるのかを明らかにすることを第1の目的とする。親の期待と親子関係を同時に説明変数とし、子どもの目標を目的変数とする重回帰分析を用いて、親の期待と親子関係が同時に子どもの目標を高めるのかを検討する。

また、親の期待と親子関係が子どもの目標に影響するというだけではなく、子どもの能力や目標の高さが親の期待を決定づける、または親の期待と子どもの目標の関係によって親子関係が変化する、ということも考えられる。文野・藤田(2000)は、親の統制的な養育態度が子どもの攻撃行動を促進するだけでなく、子どもの攻撃行動が親の統制的な養育態度を促進しているという双方向の規定性を示している。親子関係や親の期待が子どもの目標に影響するというモデルは親の教育的な見地から生成されたものであり、実際問題として、親の期待と子どもの目標は相互規定的な側面があることが予想される。変数間の相互規定性が想定される場合は、片方がもう一方に影響するというモデルと逆方向のモデルのどちらが、よりモデルとしての当てはまりがよいかということ論じることがあまり意味がない。そこで本研究では親の期待と親子関係が子どもの目標にどのように影響するのかというモデルではなく、親子関係と親の期待と子どもの目標の関係について検討することを第2の目的とする。親の期待と子どもの目標は親子関係と子どもの目標以上に密接に結びついていることが予想される。そして、親の期待と子どもの目標のありようは親子関係の評価と関連があるものと思われる。そこで本研究では、親子関係のよさによって調査対象者を群分けし、各群の期待と目標はどのような分布を示し、さらにどのような関連を示すのかを明らかにする。

親子関係や親の養育態度に関する研究では、上記で触れたものも含め、多くの研究において親の養育態度をいくつかの下位概念に分けてとらえ、それらの下位概念が果たす役割を個別に検討するというアプローチがとられてきている。しかしBaumrind(1967)に端を発する威厳ある(authoritative)親の養育態度の有効性を示す一連の研究において、威厳ある親子関係とは親の子どもに対する「受容」と「統制」、「心理的自律性の尊重」の3つが揃って高いことを指しており(Maccoby & Martin 1983; Lamborn, Mounts, Steinberg, & Dornbusch, 1991)、親子関係に関して下位概念ごとに捉えるのではなく、全般的に捉えることの必要性を主張している。そのような中で威厳ある家庭の子どもは学校で仲間より高いパフォーマンスをあげることや、学業成績以外の学校での成果においても親の威厳ある養育態度が肯定的な影響を与えることが繰り返し示唆されてい

る (Dornbusch, Ritter, Leiderman, Roberts, & Fraleigh, 1987; Lamborn et al., 1991; Steinberg, Elmen, & Mounts, 1989; Strage & Brandt, 1999)。これは親子関係を下位概念に分けてとらえ、それぞれがどのように影響するのかわけではなく、全般的な親子関係のよさが子どもにポジティブな影響をもたらすということを示唆するものである。そこで本研究は親の期待が子どもの目標に影響を与える際の影響力を決定する要因として、全般的な親子関係のよさを扱うこととする。

親子関係は発達的に変化するとも言われている。柏木 (1974) は、子どもが成長していくにしたがって親の強化の規定性は相対的に小さくなっていくと述べている。また、佐々木 (1995) は成人への過渡期の特徴として、家族との距離感が増大すること、親の援助や権威に対する依存が減ることなどをあげている。そして落合・佐藤 (1996) によると、青年期の親子関係は心理的離乳へと向かって発達的に変化していくとしている。小学校から中学校にかけての変化として、小学校の低学年においてほとんどの児童が親を絶対的な権力の持ち主として見なしているが、4年生以降は、徐々に仲間の権威を親や教師といった大人の権威よりも高くとらえるようになっていく (渡辺, 1989)、親の社会的および反社会的な意見や態度のどちらに対しても中学生の親への同調と対立がそれぞれみられ、青年期における親への反抗は単なる非行というだけでなく、親子関係における青年の主体性のあらわれでもある (宮野, 1984) などが明らかにされている。小保方・無藤 (2005) は中学生の非行傾向行為の規定要因及び抑止要因について検討する中で、親子関係の親密さも、セルフコントロールの強さも非行傾向を減少させるが、学年が低い方が親子関係の親密さが子どもの非行傾向行為に影響を与えているのに対し、学年が上がるとセルフコントロールの影響が増加することを示している。これらの親子関係の発達的な変化の知見から、子どもの目標に親の期待が強い影響を及ぼすような親子関係も子どもの発達に伴って変化する可能性が考えられる。さらに小学校と中学校の差異、小学校から中学校への移行は、多くの研究者が子どもにとっての大きな問題であるとして、中学校進学時の子どもの環境認知や子どもの自己評価の変化や適応について多くの研究が行われてきた。小泉 (1992) は小学校と中学校の学校環境の違いとして、(1)学級担任制から教科担任制への移行、(2)カリキュラムの細分化、(3)教師主導の授業への変化をあげている。遠山・浅田 (1995) は中学校へ進学した生徒が学校環境の変化として、(1)定期考査が行われる、(2)校則が厳しくなる、(3)英語の授業が始まるなどを認知していることを示している。また、中学校進学に伴い子どもた

ちは (1)教師との相互作用の減少 (Feldlaufer, Midgley, & Eccles, 1988)、(2)他の生徒との比較の増加 (Feldlaufer et al., 1988)、(3)匿名性の上昇 (Blyth, Simmons, & Carlton-Ford, 1983) などを感じていることも報告されている。このように小学校と中学校では制度および環境が大きく変化する。校種の違いによって制度および環境が異なることから、親が子どもに対して持つ期待や教育目標、そして子ども自身が持つ目標も変化する可能性がある。さらには小学生と中学生では、子どもの目標が親の期待や教育目標に強く影響を受けるような親子関係のあり方が異なる可能性が考えられる。そこで本研究では、校種による差異、もしくは発達段階的な差異についても検討するため小学生と中学生を対象として調査を行う。親の教育目標と子どもの目標の関係が親子関係によってどのように異なるのかを明らかにすることで、教育的な視点で小学生と中学生の目標形成に影響する要因を理解するための一助になるような提案をすることができると思われる。

Lamborn et al. (1991)、Steinberg et al. (1992) において、親の受容や統制や要求といった親子関係についての評定は父母の両方と同居している場合は、父母に関する評定の平均を、片親とのみ同居している場合はその親に関する評定を分析に用いている。そこで本研究でも Lamborn et al. (1991)、Steinberg et al. (1992) らの方法にならう。なお、子どもの親についての評定の信頼性については、Schwartz, Barton-Henry, & Pruzinsky (1985) が、親の自己報告が信頼できないことを示しているのに対し、Golden (1969)、Moskowitz & Schwarz (1982) では、青年が述べる親の振る舞いについての情報は信頼できることが報告されている。また、文野・藤田 (2000) において、母親の受容的な養育態度についての評定は母親の自己評定と子どもの評定にあまり関連がみられない上に、子どもの認知した親の養育態度が子どもに影響を与えることが示されている。そのため、本研究では子どもの目標だけでなく親の期待や親子関係についても、親ではなく子どもに評定を求める。

## 方法

### 調査対象

小学生については愛知県および兵庫県内の公立小学校に在籍する5年生53名、6年生115名、計168名 (男子81名、女子87名)、中学生については愛知県内の公立中学校の1年生142名、兵庫県内の公立中学校の3年生121名、計263名 (男子145名、女子118名) の児童生徒から回答が得られた。調査対象の学校は全て都市郊外部に位置す

る中規模校であった。

### 調査実施時期

愛知県内の小学6年生を対象にした調査は1997年7月に、愛知県および兵庫県内の小学5年生、兵庫県内の小学6年生を対象にした調査は1998年9月に、兵庫県内の中学3年生を対象にした調査は1997年4月に、愛知県内の中学1年生を対象にした調査は1998年7月に実施された。

### 調査内容（質問紙の構成）

質問紙には(1)親子関係、(2)子ども自身の目標、(3)親からの期待という順序で質問項目を配置した<sup>3)</sup>。項目内容については、事前に小学校教諭2名、中学校教諭5名によって児童生徒に理解可能か、教育的に不適切な項目はないかなどが確認された。

(1) 親子関係 小学生、中学生の認知している全般的な親子関係をとらえるために、今回作成した6項目からなる「簡易版親子関係尺度」が用いられた。項目の内容は「親しさ」、「相互理解」、「信頼」、「尊敬」、「服従」などについてたずねるものであった。具体的には父母別の「私は、お父さん／お母さんを尊敬しています」など6項目合計12項目に対し、「とてもあてはまる（3点）」から「あてはまらない（0点）」までの4件法で評定を求める形式であった。

(2) 子ども自身の目標 小学生・中学生が認知している父親からの期待、母親からの期待と自分自身の目標をとらえるために、今回作成した35項目からなる「父親・母親の期待／子どもの目標尺度」が用いられた。項目の内容は「学業」、「友人関係」、「他者に対する態度」、「規範」、「優しさ」、「責任感」、「生活習慣」、「将来の進路」に関するものであった。質問紙の目標に関する部分はこれらの35項目について自分はそうしようとの程度強く思うかを「とてもそうしようと思う（3点）」から「そうしようと思わない（0点）」までの4件法で評定するよう求めるものであった。

(3) 親からの期待 親からの期待を測る項目は「父親・母親の期待／子どもの目標尺度」の内容について「お父さん／お母さんからそのようにすることをどの程度強く期待されていると思うか」を父母別にそれぞれ35項目、

3) 子どもに自分の目標をたずねる前に親からの期待の認知をたずねた場合、認知している親の期待の評定が本人の目標についての評定に影響を与える可能性を考え、質問項目の配置は(1)親子関係、(2)子ども自身の目標、(3)親からの期待という順序とした。

計70項目について評定を求めるものであった。回答形式は「とても期待されている（3点）」から「期待されていない（0点）」までの4件法であった。

### 手続き

質問紙は担任教師によって配布され、授業時間を利用して一斉に調査が行われた。担任教師は質問紙の構成に従い(1)親子関係、(2)本人の目標、(3)親の期待という順で回答するように指示した。両親と同居している調査協力者には父親、母親について回答を求め、父親または母親とだけ同居している調査協力者には同居している親についてのみ回答を求めた。

### 結果<sup>4)</sup>

回答の不備が見つかった調査協力者2名のデータを分析対象から除外し、小学生168名（男子81名、女子87名）、中学生261名（男子143名、女子118名）の回答を分析の対象とした。

### 各尺度の因子構造

(1) 親子関係尺度 小学生、中学生の父子関係、母子関係それぞれ6項目、計12項目についての評定を得点化した。親との関係を「全般的な親子関係のよさ」として1因子で捉えることの妥当性を確認するために、主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から1因子性が強いことが示された。そのため、親子関係は1因子からなるものと判断した。説明率は47.52%であった。Table 1に因子負荷行列を示す。

Table 1 親子関係についての因子分析結果  
(主因子法)

	親子関係
尊敬している(母)	.76
気持ちをわかってくれる(母)	.71
尊敬している(父)	.71
信頼している(母)	.70
親しくしている(母)	.70
信頼している(父)	.70
気持ちをわかってくれる(父)	.69
親しくしている(父)	.68
気持ちをわかっている(父)	.60
気持ちをわかっている(母)	.58
言うことを聞く(母)	.48
言うことを聞く(父)	.48

4) 本研究の統計的分析には SPSS 14.0J for Windows を用いた。

因子負荷量は全て .40 以上であったため、全12項目を採用した。尺度の信頼性を検討するために、 $\alpha$ 係数を算出した。 $\alpha$ 係数は .90 であった。したがって親子関係尺度の信頼性は高いといえる。

(2) 子ども目標尺度と親期待尺度 子どもの目標と親の期待の因子構造を明らかにするために、子ども自身の目標の35項目に対する評定を得点化し、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。さらに父親と母親の期待の各35項目、計70項目についても評定を得点化し、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況、因子の解釈可能性などから子どもの目標、親の期待はともに3因子での分析が本研究においては妥当であろうと判断された<sup>5)</sup>。子どもの目標、父親と母親の期待に関して、全ての因子に対して因子負荷量が .40 未満の項目や複数の因子に対する因子負荷量の絶対値が .35 以上の項目など、いくつかの項目を削除しながら繰り返し同様の因子分析を行った。その結果、子どもの目標については13項目を削除した22項目の項目群 (Table 2 参照) を、父親と母親の期待については子どもの目標で削除した項目に該当する父親の期待と母親の期待に関する26項目を削除した44項目の項目群 (Table 3 参照) を対象に因子分析を行った際に、子どもの目標と父親と母親の期待は全ての項目が3つの因子のうちの1つの因子に対してのみ .40 以上の因子負荷量を持ちながら、子どもの目標と親の期待がそれぞれの因子に同じ内容の項目を持つことが確認された。子どもの目標の説明率は46.67%、親の期待の説明率は53.23%であった。子どもの目標の因子パターン行列および因子間相関を Table 2 に、親の期待の因子パターン行列および因子間相関を Table 3 に示す。

子どもの目標の第1因子は「個性のある人になる」、「責任感のある人になる」、「生活をたのしむ」などの14項目からなった。親の期待の第1因子は子どもの目標の第1因子に含まれる項目の父親と母親からの期待に関する28項目からなった。項目内容から「人格面での成長目標」因子、「人格面での成長期待」因子と命名された。

子どもの目標の第2因子は「寄り道や買い食いをしていない」、「きまりを守る」、「服装や髪の毛をきちんとする」などの4項目からなった。親の期待の第3因子は子どもの目標の第2因子に含まれる項目の父親と母親からの期待に関する8項目からなった。項目内容から「規範に関する目標」因子、「規範に関する期待」因子と命名された。

5) 親の期待と子どもの目標の関連を検討するという本研究の目的から、因子分析では親の期待と子どもの目標が同一の項目内容を持つ因子構造を探索した。

Table 2 子どもの目標の因子分析結果  
(主因子法、プロマックス回転後)

	人格	規範	進路
個性のある人になる	.76	-.24	-.02
責任感のある人になる	.67	.08	-.05
生活を楽しむ	.63	-.01	-.06
自分に誇りを持てる人になる	.62	.02	.05
優しい人になる	.62	.19	-.09
失敗にくじけない人になる	.62	.04	-.04
人の言いなりにならず、自分で考えられる人になる	.61	-.08	-.02
強い人になる	.56	.02	.06
将来、幸せな家庭を築く	.53	-.08	.06
どんなことでも人に負けない人になる	.53	.06	.10
気持のこまやかな人になる	.51	.27	.04
何か一つのことでは人に負けない人になる	.47	-.05	.13
友達がたくさんいる	.47	.09	-.01
友達と仲良くする	.43	.15	-.10
寄り道や買い食いをしない	-.09	.79	-.10
きまりを守る	.02	.68	.09
服装や髪の毛をきちんとする	-.02	.65	-.06
宿題をきちんとする	.14	.43	.09
将来、優秀な技能を持った大人になる	.13	-.18	.71
将来、お金で困らないようになる	-.04	-.13	.58
将来、高い学力の必要な学校に進学する	-.05	.19	.55
将来、親の期待するような職業に就く	-.10	.26	.51
因子相関行列	人格	規範	進路
	人格	(.88)	
	規範	.58	(.75)
	進路	.45	.35 (.68)

( ) 内は尺度の  $\alpha$  係数

た。

子どもの目標の第3因子は「将来、優秀な技能を持った大人になる」、「将来、お金で困らないようになる」、「将来、高い学力の必要な学校に進学する」などの4項目からなった。親の期待の第2因子は子どもの目標の第3因子に含まれる項目の父親と母親からの期待に関する8項目からなった。項目内容から「将来の進路に関する目標」因子、「将来の進路に関する期待」因子と命名された。

各尺度の信頼性を検討するために、 $\alpha$ 係数を算出したところ、子どもの目標、親の期待のそれぞれの下位尺度に関して .68~.96 という尺度の内的一貫性を示す十分に高い係数が得られた。したがって各下位尺度の信頼性は高いといえる。

#### 各尺度得点の算出

親子関係尺度、子どもの目標と親の期待の各因子を構成する項目の評定値の平均値を個人ごとに算出し、それらを各尺度得点とした。各尺度得点の平均値と標準偏差を算出したところ (Table 4 参照)、天井効果および床

Table 3 親の期待の因子分析結果  
(主因子法, プロマックス回転後)

	人格	進路	規範
責任感のある人になる (母)	.78	.01	-.06
優しい人になる (母)	.75	-.14	.05
責任感のある人になる (父)	.75	.02	.01
自分に誇りを持てる人になる (母)	.74	.10	-.09
優しい人になる (父)	.74	-.15	.13
将来, 幸せな家庭を築く (母)	.73	.06	-.18
自分に誇りを持てる人になる (父)	.70	.06	.00
どんなことでも人に負けない人になる (母)	.70	.06	-.01
人の言いなりにならず, 自分で考えられる人になる (母)	.70	.07	-.12
将来, 幸せな家庭を築く (父)	.70	.04	-.08
何か一つのことでは人に負けない人になる (父)	.68	.16	-.14
失敗にくじけない人になる (母)	.68	.05	.03
何か一つのことでは人に負けない人になる (母)	.67	.16	-.17
個性のある人になる (父)	.67	.06	-.08
人の言いなりにならず, 自分で考えられる人になる (父)	.66	.14	-.03
失敗にくじけない人になる (父)	.66	.03	.09
個性のある人になる (母)	.66	.05	-.10
気持のこまやかな人になる (父)	.65	-.03	.17
気持のこまやかな人になる (母)	.65	-.04	.17
どんなことでも人に負けない人になる (父)	.64	.11	.00
強い人になる (母)	.62	.07	.04
強い人になる (父)	.57	.10	.04
友達がたくさんいる (母)	.57	-.21	.23
生活を楽しむ (父)	.56	-.03	.12
生活を楽しむ (母)	.54	.01	.10
友達と仲良くする (母)	.50	-.24	.28
友達がたくさんいる (父)	.50	-.17	.34
友達と仲良くする (父)	.47	-.24	.39
将来, 優秀な技能を持った大人になる (父)	.12	.74	-.05
将来, 優秀な技能を持った大人になる (母)	.20	.72	-.14
将来, 高い学力の必要な学校に進学する (父)	-.07	.72	.15
将来, 親の期待するような職業に就く (母)	.03	.70	.04
将来, 高い学力の必要な学校に進学する (母)	-.05	.70	.09
将来, お金で困らないようになる (母)	.00	.68	.11
将来, 親の期待するような職業に就く (父)	.03	.68	.07
将来, お金で困らないようになる (父)	.00	.65	.16
寄り道や買い食いをしない (父)	-.19	.10	.82
寄り道や買い食いをしない (母)	-.13	.11	.78
服装や髪の毛をきちんとする (父)	-.06	.03	.76
服装や髪の毛をきちんとする (母)	-.08	.07	.75
きまりを守る (父)	.10	.04	.66
きまりを守る (母)	.19	.07	.55
宿題をきちんとする (父)	.12	.15	.50
宿題をきちんとする (母)	.11	.21	.42
因子相関行列	人格	進路	規範
	人格 (.96)		
	進路 .50 (.88)		
	規範 .56 .31 (.91)		

( ) 内は尺度の  $\alpha$  係数

Table 4 各尺度得点の平均および標準偏差

		平均値	S.D.	最大値	最小値
親子関係	小学校	2.09	0.49	3.00	0.42
	中学校	1.80	0.57	3.00	0.17
人格期待	小学校	2.40	0.48	3.00	0.89
	中学校	2.32	0.56	3.00	0.39
規範期待	小学校	2.40	0.53	3.00	0.75
	中学校	2.16	0.69	3.00	0.00
進路期待	小学校	2.07	0.72	3.00	0.00
	中学校	1.88	0.77	3.00	0.00
人格目標	小学校	2.35	0.43	3.00	1.07
	中学校	2.36	0.48	3.00	0.21
規範目標	小学校	2.27	0.57	3.00	0.50
	中学校	2.16	0.67	3.00	0.00
進路目標	小学校	1.94	0.62	3.00	0.25
	中学校	1.68	0.70	3.00	0.00

効果は認められないことが確認された。

さらに独立変数を校種 (小学校/中学校), 性別 (男子/女子) とし, 従属変数を「親子関係」得点, 「人格面での成長期待」得点, 「規範に関する期待」得点, 「将来の進路に関する期待」得点, 「人格面での成長目標」得点, 「規範に関する目標」得点, 「将来の進路に関する目標」得点とする 2 要因の分散分析をそれぞれ行った。交互作用がみられた場合は下位検定として単純主効果の検定を行った。

その結果, 「親子関係」得点については, 校種と性別の交互作用はみられなかった ( $F(1, 425) = 0.05, n.s.$ )。校種の主効果 ( $F(1, 425) = 29.04, p < .01$ ) と性別の主効果 ( $F(1, 425) = 8.42, p < .01$ ) がそれぞれ有意であった。小学生は (平均 2.09) 中学生 (平均 1.80) に比べて, 女子 (平均 2.02) は男子 (平均 1.87) に比べて, それぞれ全般的な親子関係がよいと認知していた。

「人格面での成長期待」得点については, 校種と性別の交互作用 ( $F(1, 425) = 0.02, n.s.$ ), および校種 ( $F(1, 425) = 2.18, n.s.$ ) と性別 ( $F(1, 425) = 0.06, n.s.$ ) の主効果はいずれもみられなかった。

「規範に関する期待」得点については, 校種×性別の交互作用 ( $F(1, 425) = 4.64, p < .05$ ) が有意であった。単純主効果の検定において, 小学生女子 (平均 2.49) は中学生女子 (平均 2.12) よりも ( $F(1, 425) = 17.48, p < .01$ ), 小学生男子 (平均 2.30) よりも ( $F(1, 425) = 3.76, p < .10$ ) 規範に関する期待が高いと認知していること, またはその傾向があることが示された。中学生男子 (平均 2.20) は小学生男子との間にも ( $F(1, 425) = 1.38, n.s.$ ), 中学生女子との間にも ( $F(1, 425) = 1.06, n.s.$ ) 規範に関する期待の認知に差がなかった。

「将来の進路に関する期待」得点については, 校種と

性別の交互作用はみられなかった ( $F(1, 425) = 1.91, n.s.$ )。校種の主効果 ( $F(1, 425) = 7.04, p < .01$ ) と性別の主効果 ( $F(1, 425) = 6.96, p < .01$ ) がそれぞれ有意であった。小学生は (平均2.07) 中学生 (平均1.88) に比べて、男子 (平均2.07) は女子 (平均1.88) に比べて、それぞれ将来の進路に関する期待が高いと認知していた。

「人格面での成長目標」得点については、校種と性別の交互作用はみられなかった ( $F(1, 425) = 0.45, n.s.$ )。校種の主効果はみられなかった ( $F(1, 425) = 0.08, n.s.$ )。性別の主効果 ( $F(1, 425) = 5.46, p < .05$ ) が有意であった。女子 (平均2.41) は男子 (平均2.30) に比べて、人格面での成長目標が高かった。

「規範に関する目標」得点については、校種×性別の交互作用 ( $F(1, 425) = 14.67, p < .01$ ) が有意であった。単純主効果の検定において、小学生女子 (平均2.47) は中学生女子 (平均2.13) と比較しても ( $F(1, 425) = 15.59, p < .01$ )、小学生男子 (平均2.06) と比較しても ( $F(1, 425) = 19.23, p < .01$ )、規範に関する目標が高かった。中学生男子 (平均2.18) は小学生男子との間にも ( $F(1, 425) = 2.10, n.s.$ )、中学生女子との間にも ( $F(1, 425) = 0.44, n.s.$ ) 規範に関する目標に差がな

かった。

「将来の進路に関する目標」得点については、校種と性別の交互作用はみられなかった ( $F(1, 425) = 0.95, n.s.$ )。校種の主効果 ( $F(1, 425) = 15.64, p < .01$ ) と性別の主効果 ( $F(1, 425) = 6.69, p < .05$ ) がそれぞれ有意であった。小学生は (平均1.94) 中学生 (平均1.68) に比べて、男子 (平均1.90) は女子 (平均1.73) に比べて、それぞれ将来の進路に関する目標が高かった。

親の期待と親子関係の子どもの目標への影響

「親子関係」得点が校種と性別によって異なるという結果が示されたため、以後は校種および性別ごとに分析を行った。まず親子関係尺度および子どもの目標と親の期待の下位尺度の各尺度得点間の相関係数を小学生、中学生で男女別に算出した。その結果をTable 5, Table 6に示す。重回帰分析における多重共線性による分析の過誤が生じない程度にそれぞれの変数が独立していることが確認された。そこで「親の期待と親子関係が子どもの目標に影響する」というモデルについて検討を行うために小学生、中学生の男女別に「人格面での成長目標」得点、「規範に関する目標」得点、「将来の進路に関する目標」得点のそれぞれを目的変数、「人格面での成長期

Table 5 小学生の各尺度得点間の相関

	親子関係	期 待			目 標		
		人 格	規 範	進 路	人 格	規 範	進 路
親子関係		.51**	.43**	.23*	.43**	.43**	.31**
人 格	.41**		.52**	.57**	.66**	.23*	.42**
期 待	規 範	.24*	.57**		.52**	.24*	.49**
進 路	.12	.60**	.37**		.38**	.26*	.58**
目 標	人 格	.37**	.71**	.33**	.49**		.31**
規 範	.28**	.36**	.56**	.32**	.50**		.26*
進 路	.17	.47**	.32**	.66**	.49**	.35**	

右上は小学生男子 (n = 81) の相関係数, 左下は小学生女子 (n = 87) の相関係数  
\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 6 中学生の各尺度得点間の相関

	親子関係	期 待			目 標		
		人 格	規 範	進 路	人 格	規 範	進 路
親子関係		.40**	.31**	.11	.39**	.38**	.26**
人 格	.38**		.62**	.54**	.66**	.48**	.35**
期 待	規 範	.25**	.55**		.43**	.41**	.66**
進 路	.06	.37**	.36**		.36**	.28**	.62**
目 標	人 格	.40**	.63**	.34**	.15	.61**	.38**
規 範	.31**	.26**	.58**	.13	.47**		.34**
進 路	.19*	.25**	.24**	.56**	.26**	.23*	

右上は中学生男子 (n = 143) の相関係数, 左下は中学生女子 (n = 118) の相関係数  
\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

待」得点、「規範に関する期待」得点、「将来の進路に関する期待」得点の中で目標得点の内容に対応する期待得点と「親子関係」得点を予測変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。

「人格面での成長目標」得点を目的変数とした重回帰分析の結果は以下の通りであった。小学生男子については「人格面での成長期待」得点が有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となり ( $\beta = .66, p < .01$ )、「親子関係」得点は説明変数から除外された。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .43 であった ( $F(1, 80) = 61.30, p < .01$ )。小学生女子については「人格面での成長期待」得点が有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となり ( $\beta = .71, p < .01$ )、「親子関係」得点は説明変数から除外された。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .50 であった ( $F(1, 86) = 88.00, p < .01$ )。中学生男子については「人格面での成長期待」得点 ( $\beta = .60, p < .01$ ) と「親子関係」得点 ( $\beta = .16, p < .05$ ) がともに有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となった。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .45 であった ( $F(2, 141) = 58.33, p < .01$ )。中学生女子については「人格面での成長期待」得点 ( $\beta = .56, p < .01$ ) と「親子関係」得点 ( $\beta = .19, p < .05$ ) がともに有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となった。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .42 であった ( $F(2, 116) = 42.79, p < .01$ )。

「規範に関する目標」得点を目的変数とした重回帰分析の結果は以下の通りであった。小学生男子については「規範に関する期待」得点 ( $\beta = .37, p < .01$ ) と「親子関係」得点 ( $\beta = .28, p < .05$ ) がともに有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となった。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .28 であった ( $F(2, 79) = 17.60, p < .01$ )。小学生女子については「規範に関する期待」得点が有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となり ( $\beta = .56, p < .01$ )、「親子関係」得点は説明変数から除外された。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .31 であった ( $F(1, 86) = 39.71, p < .01$ )。中学生男子については「規範に関する期待」得点 ( $\beta = .59, p < .01$ ) と「親子関係」得点 ( $\beta = .21, p < .05$ ) がともに有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となった。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .46 であった ( $F(2, 141) = 61.19, p < .01$ )。中学生女子については「規範に関する期待」得点 ( $\beta = .53, p < .01$ ) と「親子関係」得点 ( $\beta = .18, p < .05$ ) がともに有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となった。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .35 であった ( $F(2, 116) = 33.11, p < .01$ )。

「将来の進路に関する目標」得点を目的変数とした重回帰分析の結果は以下の通りであった。小学生男子につ

いては「将来の進路に関する期待」得点 ( $\beta = .54, p < .01$ ) と「親子関係」得点 ( $\beta = .19, p < .05$ ) がともに有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となった。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .36 であった ( $F(2, 79) = 23.11, p < .01$ )。小学生女子については「将来の進路に関する期待」得点が有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となり ( $\beta = .66, p < .01$ )、「親子関係」得点は説明変数から除外された。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .43 であった ( $F(1, 86) = 65.34, p < .01$ )。中学生男子については「将来の進路に関する期待」得点 ( $\beta = .60, p < .01$ ) と「親子関係」得点 ( $\beta = .21, p < .01$ ) がともに有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となった。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .42 であった ( $F(2, 141) = 51.15, p < .01$ )。中学生女子については「将来の進路に関する期待」得点 ( $\beta = .55, p < .01$ ) と「親子関係」得点 ( $\beta = .16, p < .05$ ) がともに有意な標準偏回帰係数を持つ説明変数となった。自由度調整済み決定係数  $R^2$  は .32 であった ( $F(2, 116) = 28.82, p < .01$ )。

#### 親子関係による親の期待と子どもの目標の分布の差異

庄司・藤田(2000)は中学生の親の養育態度と親の期待の認知が関連していることを示している。大芦他(1996)も親の価値観が親の養育態度と関連していることを示している。本研究においても「親子関係」得点が親の期待の下位尺度得点および、子どもの目標の多くの下位尺度得点と有意な正の相関が小学生、中学生の男女全てにみられた。これらの結果からも、親子関係によって親の期待と子どもの目標の分布の形状が異なる可能性が考えられる。そこで、ここからは親子関係による期待と目標の関係性の違いを探索的に検討する。「親子関係」得点は、校種、性別によって異なることが示されたため、小学生男子、小学生女子、中学生男子、中学生女子のそれぞれで、まず「親子関係」得点を標準化した。その上でそれぞれ親子関係の標準得点が0.5以上をH群、親子関係標準得点が-0.5未満をL群とした<sup>6)</sup>。小学生男子H群は28名、L群は20名、小学生女子H群は28名、L群は26名、中学生男子H群は42名、L群は37名、中学生女子H群は44名、L群は28名であった。各群の「人格面での成長期待」得点と「人格面での成長目標」得点、「規範に関する期待」得点と「規範に関する目標」得点、「将来の進路に関する期待」得点と「将来の進路に関する

6) 親子関係標準得点が-0.5以上、0.5未満のM群は以後の分析から除外している。



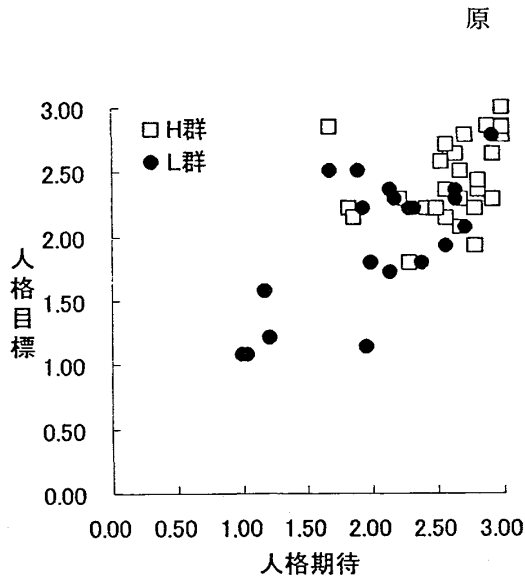


Figure 1 小学生男子の人格面での成長の期待得点と目標得点の分布

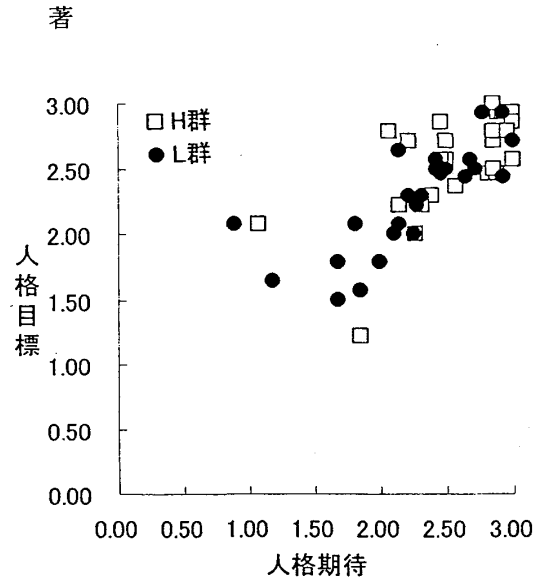


Figure 2 小学生女子の人格面での成長の期待得点と目標得点の分布

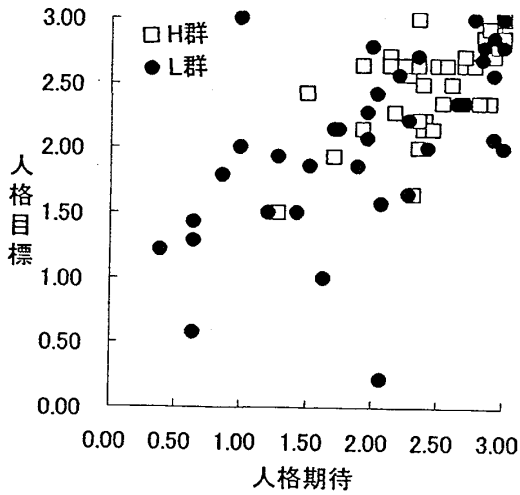


Figure 3 中学生男子の人格面での成長の期待得点と目標得点の分布

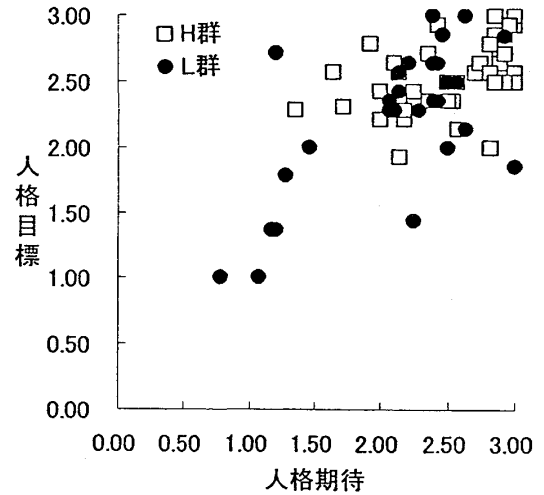


Figure 4 中学生女子の人格面での成長の期待得点と目標得点の分布

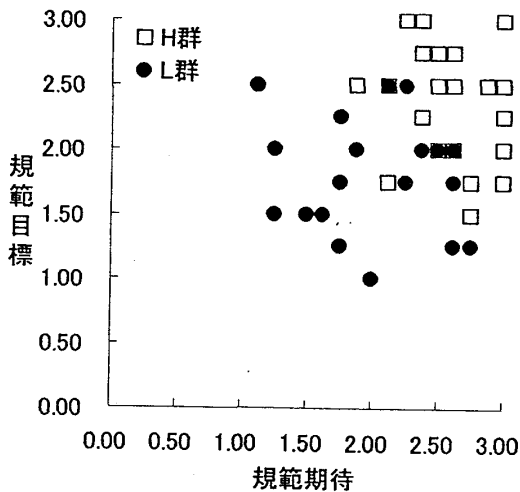


Figure 5 小学生男子の規範に関する期待得点と目標得点の分布

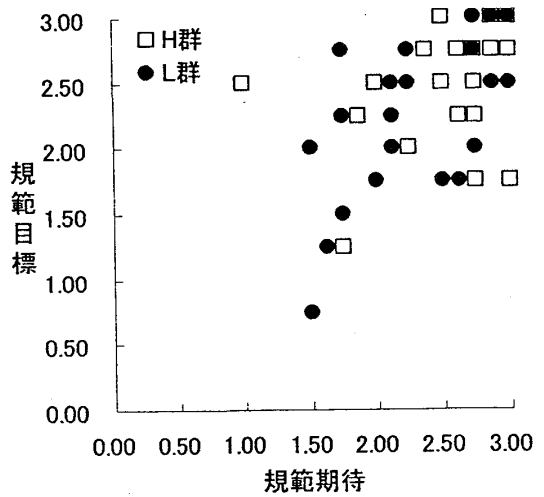


Figure 6 小学生女子の規範に関する期待得点と目標得点の分布

小・中学生の親子関係、親からの期待、子どもの目標の関係

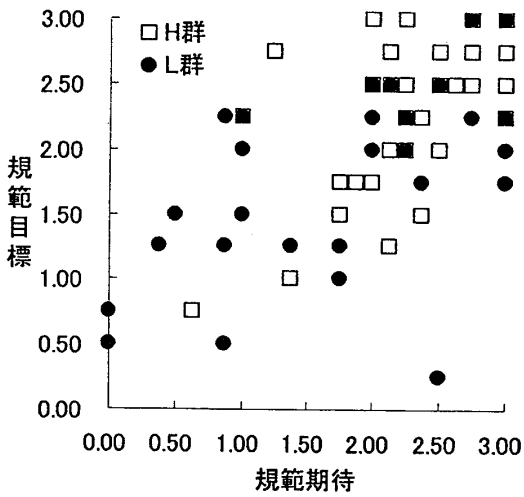


Figure 7 中学生男子の規範に関する期待得点と目標得点の分布

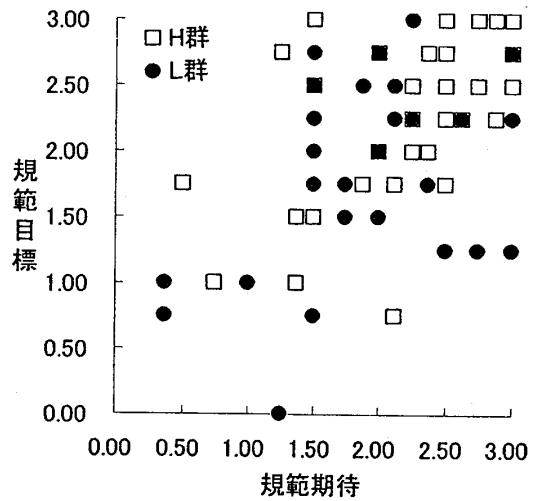


Figure 8 中学生女子の規範に関する期待得点と目標得点の分布

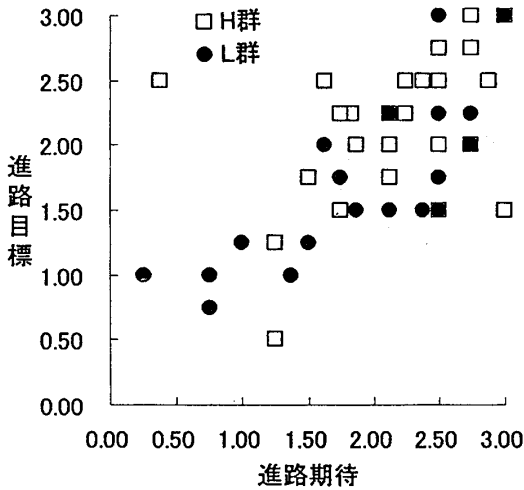


Figure 9 小学生男子の将来の進路に関する期待得点と目標得点の分布

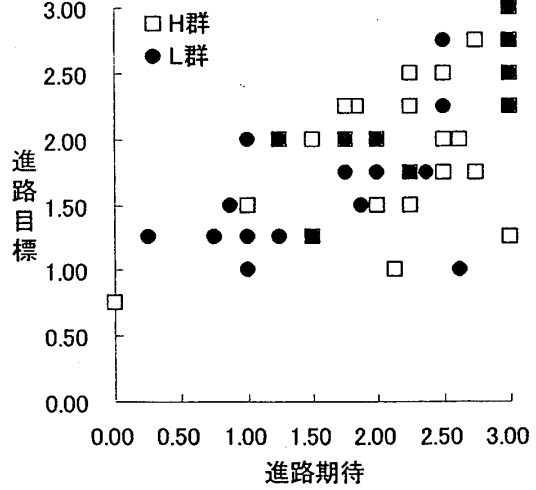


Figure 10 小学生女子の将来の進路に関する期待得点と目標得点の分布

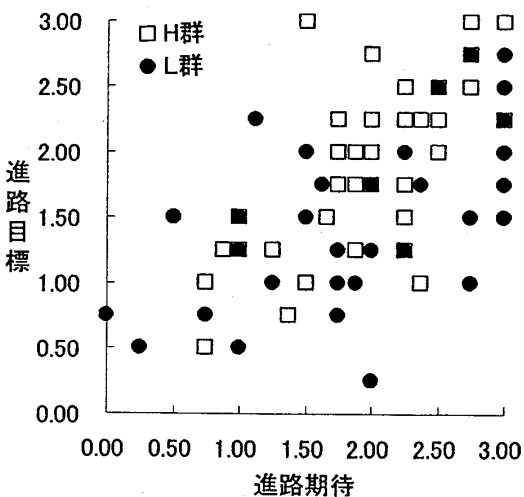


Figure 11 中学生男子の将来の進路に関する期待得点と目標得点の分布

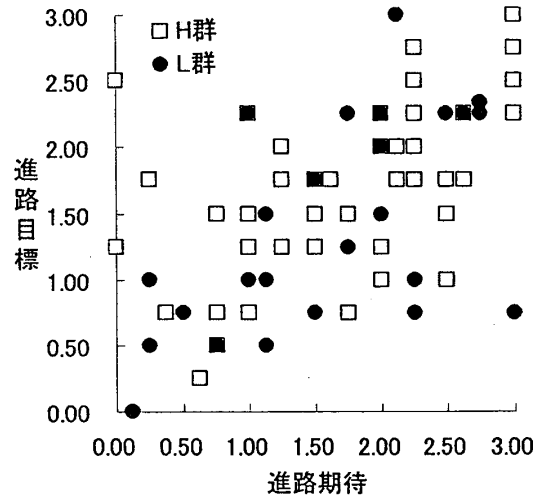


Figure 12 中学生女子の将来の進路に関する期待得点と目標得点の分布

る目標」得点のそれぞれの散布図を Figure 1～12に示す。

Figure 1～12におけるH群とL群の散布状態の違いを比較するために、小学生男子、小学生女子、中学生男子、中学生女子の「人格面での成長期待」得点と「人格面での成長目標」得点、「規範に関する期待」得点と「規範に関する目標」得点、「将来の進路に関する期待」得点と「将来の進路に関する目標」得点についてH群とL群の分散の有意差検定（両側検定）を行い、分散に有

意な差がみられなかった場合は通常の  $t$  検定（両側検定）を、有意な差がみられた場合は Welch 法による  $t$  検定（両側検定）を行った。各群の平均と標準偏差、分散の有意差検定と  $t$  検定の結果を Table 7～9に示す。

重回帰分析において、小学生男子の「規範に関する目標」、「将来の進路に関する目標」、中学生男女の全ての目標は親の期待と親子関係のよさの両者が目標を高める傾向がみられた。これらの目標については  $t$  検定の結果、「親子関係」得点のH群とL群を比較した際に、H群が

Table 7 人格面での成長期待と目標の分散の有意差検定と  $t$  検定の結果

			H群	L群	分散の有意差検定		$t$ 検定	
小学生	男子	期待平均値	2.61	2.04	$F(27, 19) = 5.11$	$L > H^*$	$t(29.40) = 3.90$	$H > L^{**}$
		S.D.	0.36	0.57				
		目標平均値	2.45	1.95	$F(27, 19) = 6.45$	$H > L^*$	$t(29.19) = 3.82$	$H > L^{**}$
		S.D.	0.32	0.52				
	女子	期待平均値	2.59	2.25	$F(27, 25) = 0.23$		$t(52) = 2.62$	$H > L^*$
		S.D.	0.45	0.51				
目標平均値		2.57	2.27	$F(27, 25) = 0.50$		$t(52) = 2.83$	$H > L^{**}$	
S.D.		0.39	0.39					
中学生	男子	期待平均値	2.52	1.97	$F(41, 36) = 14.38$	$L > H^{**}$	$t(53.96) = 3.79$	$H > L^{**}$
		S.D.	0.43	0.79				
		目標平均値	2.54	2.06	$F(41, 36) = 10.04$	$L > H^{**}$	$t(53.65) = 3.87$	$H > L^{**}$
		S.D.	0.36	0.67				
	女子	期待平均値	2.50	2.10	$F(43, 27) = 2.46$		$t(70) = 3.33$	$H > L^{**}$
		S.D.	0.43	0.60				
目標平均値		2.53	2.22	$F(43, 27) = 16.66$	$L > H^{**}$	$t(34.50) = 2.74$	$H > L^{**}$	
S.D.		0.26	0.57					

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 8 規範に関する期待と目標の分散の有意差検定と  $t$  検定の結果

			H群	L群	分散の有意差検定		$t$ 検定	
小学生	男子	期待平均値	2.62	2.03	$F(27, 19) = 7.58$	$L > H^{**}$	$t(30.00) = 4.57$	$H > L^{**}$
		S.D.	0.33	0.51				
		目標平均値	2.38	1.81	$F(27, 19) = 0.04$		$t(46) = 4.43$	$H > L^{**}$
		S.D.	0.43	0.44				
	女子	期待平均値	2.63	2.36	$F(27, 25) = 1.81$		$t(52) = 2.05$	$H > L^*$
		S.D.	0.48	0.52				
目標平均値		2.59	2.32	$F(27, 25) = 2.10$		$t(52) = 1.87$	$H > L^+$	
S.D.		0.46	0.60					
中学生	男子	期待平均値	2.34	1.87	$F(41, 36) = 12.26$	$L > H^{**}$	$t(57.72) = 2.57$	$H > L^*$
		S.D.	0.58	0.97				
		目標平均値	2.38	1.87	$F(41, 36) = 2.02$		$t(77) = 3.32$	$H > L^{**}$
		S.D.	0.60	0.75				
	女子	期待平均値	2.29	1.93	$F(43, 27) = 0.34$		$t(70) = 2.22$	$H > L^*$
		S.D.	0.64	0.71				
目標平均値		2.30	1.81	$F(43, 27) = 2.26$		$t(70) = 3.07$	$H > L^{**}$	
S.D.		0.60	0.74					

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .10$

Table 9 将来の進路に関する期待と目標の分散の有意差検定とt検定の結果

			H群	L群	分散の有意差検定	t検定
小学生	男子	期待平均値	2.21	1.84	$F(27, 19) = 2.61$	$t(46) = 1.79$ H>L <sup>+</sup>
		S.D.	0.63	0.81		
		目標平均値	2.19	1.66	$F(27, 19) = 0.36$	$t(46) = 2.88$ H>L <sup>**</sup>
		S.D.	0.60	0.66		
	女子	期待平均値	2.19	1.93	$F(27, 25) = 1.81$	$t(52) = 1.25$
		S.D.	0.70	0.82		
目標平均値		1.98	1.87	$F(27, 25) = 0.18$	$t(52) = 0.76$	
S.D.		0.56	0.58			
中学生	男子	期待平均値	2.00	1.88	$F(41, 36) = 7.49$ L>H <sup>**</sup>	$t(63.19) = 0.70$
		S.D.	0.62	0.89		
		目標平均値	1.89	1.49	$F(41, 36) = 0.30$	$t(77) = 2.74$ H>L <sup>**</sup>
		S.D.	0.66	0.64		
	女子	期待平均値	1.76	1.70	$F(43, 27) = 0.23$	$t(70) = 0.28$
		S.D.	0.87	0.86		
目標平均値		1.75	1.42	$F(43, 27) = 1.76$	$t(70) = 1.87$ H>L <sup>+</sup>	
S.D.		0.69	0.77			

\*\* $p<.01$ , \* $p<.10$

L群に比べて目標得点が高くなっていた。さらに重回帰分析では「親子関係」の影響が示されなかった小学生男子の「人格面での成長目標」、小学生女子の「人格面での成長目標」、「規範に関する目標」に関しても「親子関係」のH群はL群に比べて高い目標を持つことが示された。期待に関しては、小学生、中学生の男女の「人格面での成長期待」、「規範に関する期待」、小学生男子の「将来の進路に関する期待」については、H群はL群に比べて高いことが示された。ただし、小学生女子と中学生の男女の「将来の進路に関する期待」については親子関係のよしあしによる得点の差はみられなかった。また、散布図および分散の有意差検定とt検定の結果から、小学生、中学生の男子については「人格面での成長期待」と「人格面での成長目標」、「規範に関する期待」、中学生女子の「人格面での成長目標」は、親子関係がよい場合に高得点に集中して分布が小さくなることが確認された。

また、「親子関係」得点のL群に関しては、親の期待が高ければ子どもの目標も高く、親の期待が低ければ、子どもの目標も低い、という分布の特徴が散布図に見られた。親子関係がよいと親の期待に応えるような目標を持ち、親子関係がよくなければ親の期待とは無関係に、または親の期待に背くような形で自らの目標を設定するようになるのであれば、期待と目標の乖離は親子関係がよい場合は親子関係がよくない場合に比べて小さくなることが予想される。そこで、親の期待についての各下位尺度得点と対応する子どもの目標の下位尺度得点の差の

絶対値を「期待と目標の乖離」得点として算出し、独立変数を校種（小学生/中学生）、性別（男子/女子）、親子関係（「親子関係」得点L群/H群）とする3要因の分散分析を、期待と目標の乖離の下位尺度得点である「人格面での成長に関する期待と目標の乖離」得点、「規範に関する期待と目標の乖離」得点、「将来の進路に関する期待と目標の乖離」得点をそれぞれ従属変数として行った。

その結果、いずれの分析においても2次の交互作用は確認されなかった。複数の1次の交互作用と主効果が確認された。確認された1次の交互作用に関しては下位検定として単純主効果の検定を行った<sup>7)</sup>。校種、性別、親子関係の期待と目標の乖離への影響として、以下の結果が示された。「人格面での成長に関する期待と目標の乖離」については性別の主効果に有意傾向がみられた ( $F(1, 245) = 3.46, p<.10$ )。男子（平均0.35）は女子（平均0.28）に比べて人格面での成長に関する親の期待と子どもの目標の乖離が大きい傾向が示された。さらに、校種×親子関係の交互作用が有意であった ( $F(1, 245) = 5.54, p<.05$ )。単純主効果の検定において、中学生の親子関係L群（平均0.43）は、小学生の親子関係L群（平均0.28）と比較しても ( $F(1, 245) = 6.74, p<.05$ )、中学生の親子関係H群（平均0.26）と比較しても ( $F(1, 245) = 11.85, p<.01$ )、人格面での成長に関する

7) ここでは確認された1次の交互作用および主効果についてのみ報告を行う。

親の期待と子どもの目標の乖離が大きいことが示された。小学生の親子関係H群(平均0.29)は、小学生の親子関係L群とも( $F(1, 245) = 0.04, n.s.$ ), 中学生の親子関係H群とも( $F(1, 245) = 0.38, n.s.$ ), 人格面での成長に関する親の期待と子どもの目標の乖離の大きさに差が見られなかった。

「規範に関する期待と目標の乖離」については、校種×性別の交互作用が有意であった( $F(1, 245) = 7.09, p < .01$ )。単純主効果の検定において、小学生の女子(平均0.32)は、中学生の女子(平均0.51)と比較しても( $F(1, 245) = 6.27, p < .05$ ), 小学生の男子(平均0.54)と比較しても( $F(1, 245) = 6.80, p < .05$ ), 規範に関する親の期待と子どもの目標の乖離が小さいことが示された。中学生の男子(平均0.44)は中学生の女子とも( $F(1, 245) = 1.05, n.s.$ ), 小学生の男子とも( $F(1, 245) = 1.62, n.s.$ ), 規範に関する親の期待と子どもの目標の乖離の大きさに差が見られなかった。さらに、校種×親子関係の交互作用に有意傾向がみられた( $F(1, 245) = 2.91, p < .10$ )。単純主効果の検定において、中学生の親子関係L群(平均0.60)は、小学生の親子関係L群(平均0.46)と比較しても( $F(1, 245) = 2.91, p < .10$ ), 中学生の親子関係H群(平均0.35)と比較しても( $F(1, 245) = 13.18, p < .01$ ), 規範に関する親の期待と子どもの目標の乖離が大きいまたはその傾向があることが示された。小学生の親子関係H群(平均0.40)は小学生の親子関係L群とも( $F(1, 245) = 0.63, n.s.$ ), 中学生の親子関係H群とも( $F(1, 245) = 0.42, n.s.$ ), 規範に関する親の期待と子どもの目標の乖離の大きさに差が見られなかった。

「将来の進路に関する期待と目標の乖離」については、校種×親子関係の交互作用が有意であった( $F(1, 245) = 4.25, p < .05$ )。単純主効果の検定において、中学生の親子関係L群(平均0.64)は、小学生の親子関係L群(平均0.41)と比較しても( $F(1, 245) = 6.35, p < .05$ ), 中学生の親子関係H群(平均0.43)と比較しても( $F(1, 245) = 7.25, p < .01$ ), 将来の進路に関する親の期待と子どもの目標の乖離が大きいことが示された。小学生の親子関係H群(平均0.45)は小学生の親子関係L群とも( $F(1, 245) = 0.20, n.s.$ ), 中学生の親子関係H群とも( $F(1, 245) = 0.07, n.s.$ ), 将来の進路に関する親の期待と子どもの目標の乖離の大きさに差が見られなかった。

分布の形状および乖離得点の分散分析の結果から、性別や期待と目標の内容に関わりなく、小学生や中学生の親子関係がよい群と比較して、中学生の親子関係がよくない群は親の期待と乖離した目標を持つことが示された

といえる。また、規範に関しては小学生の女子が小学生の男子や中学生の女子よりも期待に応えるような目標を持つことも示された。

## 考 察

本研究では親子関係、親の期待、子どもの目標という3つの変数間の関連を検討するために、小学生と中学生を対象に子どもが認知している親子関係のよさ、子どもが認知している親の期待、子どもの目標についての調査を行った。親の期待と子どもの目標の因子分析から、親の期待と子どもの目標を「人格面での成長期待/目標」, 「規範に関する期待/目標」, 「将来の進路に関する期待/目標」の3つの側面で捉えることとした。

親の期待と親子関係を予測変数、子どもの目標を目的変数として重回帰分析を行った結果、校種、性別にかかわらず、親の期待の高さは子どもの目標を高めることを示唆する結果が得られた。また、親の期待と子どもの目標の得点の散布図においても、親からの期待が高ければ、子どもの目標も高く、親からの期待が低ければ子どもの目標も低い傾向が示された。これらの結果は小学生から高校生までのさまざまな年齢の子どもが、母親と同調する傾向があるという知見(藤原, 1976)や親の期待が子どもに影響することを示唆する知見(伊藤, 1980; Majoribanks, 1997; Mize & Pettit, 1997; 小川・田中, 1979, 1980; Patrikakou, 1997; Steinberg et al., 1992; 田中・小川, 1981, 1982)と整合的である。親子関係の子どもの目標への影響については、親子関係のよさが子どもの目標を高めるという結果が部分的に示されたが、全ての校種、性別の全ての領域の目標に一貫した結果ではなかった。重回帰分析において、小学生男子の規範に関する目標、将来の進路に関する目標、中学生男女の全ての目標は親子関係のよさが目標を高める傾向がみられた。この結果は親子関係のよさが子どもの目標を高めることを示唆する研究(文野・藤田, 2000; 五十嵐・荻原, 2004; 稲葉・戸田, 1999; 北村・無藤, 2001; 小嶋, 1967; 松山, 1979; Miller et al., 1991; 三隅・阿久根, 1971; 三宅・東, 1979; 宮下, 1991; 森下, 1990; 諸井, 2004; 小保方・無藤, 2005; 小野寺, 1993; 酒井, 2001; 酒井他, 2002; Sears, 1970; 孫・松原, 1991; Strage & Brandt, 1999; 清水, 1999; 谷井, 1996; 谷井・上地, 1994; 戸ヶ崎・坂野, 1997; 徳田, 1987; 山本, 1977)と整合的である。しかし、小学生男子の人格面での成長目標、小学生女子の全ての目標については、関連する内容の期待の影響は受けるものの親子関係のよさが目標を高めるわけではないことが明らかになった。さらに、親子関係が子どもの目標に与える影響を示す結

果においても、目標と同一内容の期待と比較して親子関係からの影響が小さいといえる。期待と親子関係の有意な正の相関が小学生、中学生の男女を問わずさまざまな内容の期待に関してみられた。これらの結果から、親子関係が子どもの目標を高めることを示唆するこれまでの知見においては、親の期待の高さが親子関係のよさに影響し、結果として親子関係がよいと子どもの目標が高いという結果が示されていた可能性が考えられる。つまり、子どもの目標や動機づけに対する親子関係の影響力の強さが過大に評価されてきたのかも知れない。親の期待を扱わずに親子関係と子どもの目標の関連を検討する際には、その関連が擬似的なものである可能性を考慮した上で結果の解釈を行う必要があるであろう。

親子関係がよい群とよくない群の分散の有意差検定と  $t$  検定の結果から、小学生男子の全ての目標と期待、小学生女子と中学生の男女の人格面での成長と規範に関する期待と目標、中学生の男女の将来の進路に関する目標は、親子関係がよい場合に高くなることが示された。親子関係がよい場合に期待や目標が高得点になるということは、親子関係のよさが親の期待や子どもの目標を高くするという可能性と、期待と目標が揃って高いことによって親子関係がよいと子どもに認識されている可能性の両方が考えられる。小学生、中学生にとって親子関係は子どもの目標に影響する要因ではなく、子どもの目標と親の期待によって決定されるものである可能性も今後考慮する必要があるだろう。また、小学生、中学生の男子については人格面での成長期待と人格面での成長目標、規範に関する期待、中学生女子については人格面での成長目標は、親子関係がよい場合に親の期待や子どもの目標が高得点に集中して分散が小さくなるという結果が示された。これは、親子関係がよい場合と親子関係がよくない場合のそれぞれで、期待と目標の相関係数を算出した際に、親子関係がよい群において、分布が集中することによって期待と目標の相関が弱いという結果となる可能性を示すものである。Mize & Pettit (1997) は母子関係にあたたかさがあまりみられない場合に親の働きかけと子どもの攻撃性の相関が高いとしているが、本研究の結果から、親子関係があたたかい場合に親の働きかけが高い、もしくは攻撃性が低い方向に分布が集中することによって、親の働きかけと子どもの攻撃性の関連が弱くなった可能性も考えられる。

さらに、期待と目標の乖離の大きさを、小学生と中学生の男女それぞれの「親子関係」得点のH群とL群で比較したところ、期待の内容や性別にかかわらず中学生で親子関係がよくない場合は期待と目標の乖離が大きいことが示された。散布図や  $t$  検定、分散分析に関する結

果から、小学生は親子関係がよいと親の期待と子どもの目標が高得点に集中するが、親子関係がよくないと親の期待が高ければ子どもの目標も高く、親の期待が低ければ子どもの目標も低いという傾向が示された。小学生の男子の人格面での成長目標、小学生女子の全ての目標については、関連する内容の期待の影響は受けるものの親子関係のよさが目標を高めるわけではない、小学生は親子関係に関わらず、親の期待に応えるような目標を持つという結果から、親子関係の認知が小学生にどのような影響をもたらすのかを今後検討する必要があるだろう。また、中学生は親子関係がよいと小学生と同様に親の期待に応えるような目標を持つが、親子関係がよくないと親の期待と無関係の、または親の期待に背くような形での目標を持つことが示された。これらの結果は、渡辺(1989)の、小学校4年生以降は、徐々に親や教師といった大人の権威を低くとらえ、親を絶対的な権力の持ち主として見なさなくなっていくという知見や、落合・佐藤(1996)の提唱する「心理的離乳」という青年期の親子関係の発達的变化における中学生の親子関係の特徴として小学生の時にはみられなかった「親と子が手を切る関係」、「子どもが困ったときには親が支援する関係」が含まれるようになるという知見とも整合的である。宮野(1984)は、親の社会的および反社会的な意見や態度のどちらに対しても中学生の親への同調と対立がみられ、青年期における親への反抗を親子関係における青年の主体性のあらわれとしており、加藤・高木(1980)は、反抗や内的混乱は個人の独立性を獲得する上で必要な段階であること、しかし、その時点では社会的にあまり望ましくない不適応の状況に陥ることを述べている。本研究における中学生の親子関係がよくない群の期待と目標の関係についても、必ずしも期待よりも低い目標を持つものではないことが散布図から読みとれ、この期待と目標の乖離は青年期の主体性のあらわれとも解釈できる。そのように考えると、親の期待をそのまま内面化して自らの目標とするのではなく、親の期待と自身の目標を区別することで、中学生の時に親の期待に応えるような目標を持たず、それに伴い親子関係がよくないと認知された可能性が考えられる。発達段階の一時期において親子関係がよくないことが子どもの将来の主体性にどのように影響するのかについてはさらに検討する必要がある。

本研究では小学生と中学生について、親の期待は子どもの目標に影響する、親子関係のよさは中学生において部分的に子どもの目標を高める、という親の期待や親子関係が子どもの目標に与える影響を示してきた。また、親子関係のよさは子どもの目標の高さだけでなく、子どもが認知している親の期待の高さとも関連しており、期

待と目標が揃って高いために親子関係がよいと認知される可能性が示唆された。今後は子どもが親子関係を認知する過程についてさらに検討する必要があるであろう。

本研究の問題点として、親の期待と子どもの目標が同一の因子構造になることを優先して、項目を除外しながら因子分析を繰り返したために、学業に関する親の期待と子どもの目標が扱われなくなったことがある。学業に関する親の期待や子どもの目標は小学生や中学生の生活や親子関係の中で大きな要素であることが予想されることから、学業に関する親の期待と子どもの目標の関連を含めた研究が待たれる。また、本研究における調査協力者の数が十分とはいえないこと、親の期待と子どもの目標の乖離の大きさを期待と目標を個別に測定し、差を乖離得点として算出するという方法で行ったため、差得点の信頼性に疑問が残ることなども問題である。これらを考慮すると、本研究で協力を得たよりも多数の調査協力者を対象に、期待と目標の乖離の大きさを直接測定する形で調査を行い、本研究の知見の一般性を検討する必要がある。

親子関係は中学から高校、大学にかけてさらに発達のな変化を遂げるという知見もある。中学生と高校生では家族に対して感じている心的距離が異なり、中学生の方が家族を心的に近い存在としてとらえているようである(天貝, 1996)。中学生、高校生の親子関係は中学低学年でみられる子どもが親を信頼、依存する段階から、中学中学年から高校中学年にかけて、親への反発と批判が強まる時期を経て、高校高学年以降は親子の理解と受容が強まり親子関係が再び安定する(谷井・上地, 1993)。この依存から反発を経て、再び受容しあうようになるという段階の変化に関して岡本・上地(1999)は、中学生と高校生の親イメージと友人イメージの発達の变化について、第2の個体化が行われる青年期において、児童期以前に理想化された親イメージが崩れる、しかし高校で再び理想的な存在として捉えられるようになる、愛情対象が親から友人へ移行するのではなく、親への心理的な依存関係から離脱しつつも、母親との一体感は保ちつつ、友人との親密な関係を築く、などの特徴をあげている。また、加藤・高木(1980)は、中学生、高校生、大学生の独立意識から親子関係の発達の变化を検討した結果、女子に関しては、中学生よりも高校生、大学生において「親への依存」が強くなるとしている。これらの知見から小学生と中学生だけでなく、高校生、大学生、さらには社会人や自らが親となった人間を対象とした親との関係と親の期待と自身の目標の関連を検討する研究が待たれる。

本研究においては子どもの目標に影響を与える要因と

して、親子関係と親の期待という2つの変数を扱った。しかしWentzel(1998)は親以外にも教師、仲間が子どもに大きな影響を与えていることを示しており、藤原(1976)も小学生から高校生までのさまざまな年齢の子どもが仲間、教師、母親に同調する傾向があることを示している。教師も親と同様に教育的な期待や教育目標を抱いて子どもに接する存在である。今後子どもの目標形成に関する研究を進めて行く際には、学校で教師から影響を受ける過程、友人関係の相互作用の中で目標が形成されていく過程についても検討していく必要があるだろう。

## 引用文献

- 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 *カウンセリング研究*, 29, 130-134.
- Baumrind, D. 1967 Child care practices antecedent three patterns of preschool behavior. *Genetic psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Blyth, D. A., Simmons, R. G., & Carlton-Ford, S. 1983 The adjustment of early adolescents to school transitions. *Journal of Early Adolescence*, 3, 105-120.
- Dornbusch, S., Ritter, P., Liederman, P., Roberts, D., & Fraleigh, M. 1987 The relation of parenting style to adolescent school performance. *Child Development*, 58, 1244-1257.
- Feldlaufer, H., Midgley, C., & Eccles, J. S. 1988 Student, teacher, and observer perceptions of the classroom environment before and after the transition to junior high school. *Journal of Early Adolescence*, 8, 133-156.
- 藤原正光 1976 同調性の発達の变化に関する実験的研究—同調性におよぼす仲間・教師・母親からの集団圧力の効果— *心理学研究*, 47, 193-201.
- 文野佐紀・藤田尚文 2000 親の養育態度が子どもの対人行動に及ぼす影響 高知大学教育学部研究報告, 2, 59, 43-54.
- Golden, P. C. 1969 A review of children's reports of parent behaviors. *Psychological Bulletin*, 71, 222-236.
- 五十嵐哲也・荻原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 *教育心理学研究*, 52, 264-276.
- 今井芳昭 1986 親子関係における社会的勢力の基盤 *社会心理学研究*, 1, 35-41.

- 稲葉珠樹・戸田須恵子 1999 中学生の自己概念と母親の養育態度の関係について 釧路論集, 31, 223-237.
- 伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度—大学生の職経歴選択を中心に— 教育心理学研究, 28, 67-71.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146-151.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 22, 205-215.
- 柏木恵子 1990 環境としての親の期待 発達, 11(41), 9-17.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 北村琴美・無藤 隆 2001 成人の娘の心理的適応と母娘関係: 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理学研究, 12, 46-57.
- 小高 恵 1994 親子関係と人格要因との関連性についての一考察 性格心理学研究, 2, 47-55.
- 小嶋秀夫 1967 子どもによる親の養育態度・行動の報告—セマンティック・ディファレンシャル, 質問紙と人格要因— 金沢大学教育学部紀要, 人文・社会・教育科学編, 16, 47-61.
- 小泉合三 1992 中学校進学時における生徒の適応過程 教育心理学研究, 40, 348-358.
- Lamborn, S. D., Mounts, N. S., Steinberg, L., & Dornbusch, S. M. 1991 Patterns of competence and adjustment among adolescents from authoritative, authoritarian, indulgent, and neglectful Families. *Child development*, 62, 1049-1065.
- Maccoby, E., & Martin, J. 1983 Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In E. M. Hetherington (Ed.), P. H. Mussen (Series Ed.), *Handbook of Child Psychology: Vol. 4. Socialization, Personality, and Social Development*. New York: Wiley. pp. 1-101.
- Majoribanks, K. 1997 Family contexts, immediate settings, and adolescents' aspirations. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 18, 119-132.
- 松山安雄 1979 学級におけるスクール・モラルに関する研究(第3報)—スクール・モラルと達成動機および親の指導性との関係— 大阪教育大学紀要(第IV部門), 28, 19-28.
- Miller, P. A., Bernzweig, J., Eisenberg, N., & Fabes, R. A. 1991 The development and socialization of prosocial behavior. In R. Hinde & J. Groebel (Eds.), *Cooperation and prosocial behavior*. New York: Cambridge University Press. pp. 54-77.
- 三隅二不二・阿久根求 1971 両親の指導性が児童の学業成績, テスト不安と適応性に及ぼす効果 教育・社会心理学研究, 10, 157-168.
- 宮島 喬 1994 文化的再生産の社会学: ブルデュー理論からの展開 藤原書店.
- 三宅なほみ・東 洋 1979 母親のコミュニケーションスタイルとその子供の認知発達に及ぼす影響—図形伝達課題における日米比較— 教育心理学研究, 27, 75-84.
- 宮野祥雄 1984 青年期における親への同調と対立に関する研究 心理学研究, 55, 261-267.
- 宮下一博 1991 青年におけるナルシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- Mize, J., & Pettit, G. S. 1997 Mothers' social coaching, mother-child relationship style, and children's peer competence: Is the medium the message? *Child Development*, 68, 312-332.
- 森下正康 1979 子どもの親に対する親和性と親子間の価値観および性格の類似性 心理学研究, 50, 145-152.
- 森下正康 1982 中学生における親の養育態度と対人特性の同一視 教育心理学研究, 30, 142-146.
- 森下正康 1990 親の養育態度と子どもの自己受容の発達 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, 157.
- 諸井克英 2004 若者の対人環境管理に関する社会心理学的研究(6)—親との関係経験が恋愛観におよぼす影響— 同志社女子大学学術研究年報, 55, 129-143.
- Moskowitz, D. S., & Schwartz, J.S. 1982 Validity comparison of behavior counts and ratings by knowledgeable informants. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 528-528.
- 大芦 治・岡崎奈美子・山崎久美子 1996 タイプA行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向および養育態度の影響 発達心理学研究, 7, 41-51.
- 小保方晶子・無藤 隆 2005 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行



- 為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, 16, 286-299.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 27, 272-281.
- 小川一夫・田中宏二 1980 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, 28, 328-331.
- 小口孝司 1991 母親の自己開示と養育態度が子どもの自己開示と学級集団への適応に及ぼす効果 社会心理学研究, 6, 175-183.
- 岡本清孝・上地安昭 1999 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47, 248-258.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, 64, 147-152.
- Patrikakou, E. 1997 A model of parental attitudes and the academic achievement of adolescents. *Journal of Research and development in Education*, 31, 7-26.
- 酒井 厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み 性格心理学研究, 9, 59-70.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 佐々木正宏 1995 人間関係の発達理論 澤田瑞也(編), 関 詢一・澤田瑞也(シリーズ編), 人間関係の発達心理学: 1 人間関係の生涯発達 培風館 pp.16-44.
- Schwartz, J. C., Barton-Henry, M. L., & Pruzinsky, T. 1985 Assessing child-rearing behaviors: A comparison ratings made by mother, father, child, and sibling on the CRPBI. *Child development*, 56, 462-479.
- Sears, R. R. 1970 Relation of early socialization experiences to self-concepts and gender role in middle childhood. *Child Development*, 41, 267-289.
- 清水弘司 1999 幼児期の母子分離型と青年期の自己像: 連続性と転機の検討 発達心理学研究, 10, 1-10.
- 孫 旭丹・松原達哉 1991 中学生のテスト不安と親の学習指導態度に関する研究—中国と日本との比較—カウンセリング研究, 24, 101-110.
- Steinberg, L., Elmen, J., & Mounts, N. 1989 Authoritative parenting, psychological maturity, and academic success among adolescents. *Child development*, 60, 1424-1436.
- Steinberg, L., Lamborn, S. D., Dornbusch, S. M., & Darling, N. 1992 Impact of parenting practice on adolescent achievement: Authoritative parenting, school involvement, and encouragement to succeed. *Child development*, 63, 1266-1281.
- Strage, A., & Brandt, T. S. 1999 Authoritative Parenting and College Students' Academic Adjustment and Success. *Journal of Educational Psychology*, 91, 146-156.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として— 教育心理学研究, 50, 129-140.
- 庄司知明・藤田尚文 1999 子どもから見た親の期待について—親子関係診断尺度(EICA)との関連から— 高知大学教育学部研究報告, 2, 59, 55-68.
- 田中宏二・小川一夫 1981 親の期待と親への同一視が看護職の継承に及ぼす影響 教育心理学研究, 29, 166-170.
- 田中宏二・小川一夫 1982 教師職選択に及ぼす親の影響—子の認知した親の期待と職業モデル— 教育心理学研究, 30, 257-262.
- 谷井淳一 1996 登校拒否の子どもをもつ親の親役割行動の特徴 カウンセリング研究, 29, 60-67.
- 谷井淳一・上地安昭 1993 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究, 26, 113-122.
- 谷井淳一・上地安昭 1994 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1997 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響—積極的拒否型の養育態度の観点から— 教育心理学研究, 45, 173-182.
- 遠山孝司・浅田 匡 1995 中学校進学という学校環境の移行に伴う自己評価的意識の変化 人間科学研究(神戸大学発達科学部人間科学研究センター紀要), 3, 35-50.
- 徳田完二 1987 青年期における自己評価と両親の養育態度 心理学研究, 58, 8-13.

小・中学生の親子関係，親からの期待，子どもの目標の関係

渡辺弥生 1989 児童期における公正観の発達と権威概念の発達との関係について 教育心理学研究, 37, 163-171.

Wentzel, K. R. 1998 Social Relationships and Motivation in Middle School: The Role of Parents, Teachers, and Peers. *Journal of Educational Psychology*, 90, 202-209.

山本吉廣 1977 親子関係の種類と子どもの人格特性－親子関係診断尺度EICAとYG性格検査－ 関西大学大学院人間科学, 9, 51-68.

(2006年9月29日 受稿)

付記

論文執筆および分析方法に関してご指導，ご助言をいただきました名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授（現 中部大学人文学部教授）梶田正巳先生，同研究科教授（現 中京大学社会学部教授）村上隆先生に深くお礼申し上げます。また，早稲田大学人間科学部教授 浅田匡先生，中部大学教授 小塩真司先生をはじめ多くの先生方，名古屋大学大学院教育発達科学研究科の大学院研究生，大学院生のみなさんに貴重なご助言と多くの励ましをいただきました。心より感謝申し上げます。そして何より，調査にあたってお世話になりました各小学校，中学校の先生方，児童生徒のみなさんに心よりお礼申し上げます。

ABSTRACT

The Relation of Three Variables for Elementary and Junior High School Students:  
Parents-child Relationships, Parents' Expectations, and Children's Goals.

Takashi TOHYAMA

The main purposes of this study were to examine the relation of parents-child relationships, parents' expectations, and children's goals. First of all, a survey of parents-child relationships, parents' expectations, and children's goals for elementary school and junior high school students was made. Expectations, and goals were measured by three domains; growth of character, norm, and career. Secondly, influences of expectation and parent-child relationships on goals were examined. As a result, parents' expectations influence children's goals regardless of school types, sex, and domains. However it was confirmed that parent-child relationships had influence on children's goals partially. On the basis of the parent-child relationship scores, students were divided into good/poor relation groups, according to school types and sex. Then, relationships between expectations of parents and children's goals were compared between groups. The result related with elementary school students was as follows. Students had the goals close to expectations. However, when the relationship was good, expectations and goals converged on the high scores, thereby the correlation between goals and expectations was weakened. The result related with junior high school students was as follows. The scatter graph of expectation and goal scores showed that the students with good relationship have the goals close to the expectations, and the students with poor relationship tend to have goals without influence of expectations. Some junior high school students who had goals independent of the parents' expectations might feel poor relationships. From these results, it can be said that the relation between parents' expectation and a child's goal might change parent-child relationship.

Key Words: Indistinct direction of influence, Scatter graph of expectation and goal, Weakened correlation by convergence